ども、校定本の單純なミスのために遠回りさせられることも決して少くないのである。校定には寫本を見る便宜のない人が信頼して利用できる精度が要求される。それに答えるのが寫本を見る便宜のある者の義務であろう。

最後に私事に渉るが、我々が入矢義高先生の主催される敦煌文獻の輪讀會で王梵志詩を讀み始めたのは一九八〇年三月の事であった。四年の歳月を費して、ようやく、現在知られている敦煌本王梵志詩集の全部を讀み終えたが、張氏の外に出るのは、氏が補遺として七首を錄したレニングラード本の51首だけである。それも含めて、我々自身の校定本を提出することを課さねばならないようだ。本稿で論じた事柄は輪讀會での議論に負うものが極めて大きいことを記しておきたい。

（奈良女子大學　松尾良樹）

追記：本書に對しては潘重規「王梵志詩校輯讀後記」（『敦煌學』第九輯）および項楚「王梵志詩校輯匡補」（『中華文史論叢』一九八五年第一輯）の二書評が詳細な修訂を加えている。參照して頂きたい。

蕭　鳳『蕭紅傳』

百花文藝出版社　一九八〇年十二月　一二九頁

ここ數年の「蕭紅熱」は大變なものだ。それも日本だけの現象ではない。今、單行本に限って國外で刊行されたものをあげてみよう。

一、作品集

①、『The Field of Life and Death and Tales of Holan River』Translated by Howard Goldblatt and Ellen Yeung. Indiana University Press. 臺灣版、敦煌書局股份有限公司、一九七九年八月。

②、『生死場』香港中流出版社有限公司、一九七九年十月。

③、『呼蘭河傳』黑龍江人民出版社、一九七九年十二月。

④、『跋涉』三郎・悄吟共著、黑龍江省文學藝術研究所、一九七九年（五畫印刷社、一九三三年十月復刻版、横田書店復刻）。

⑤、『生死場』黑龍江人民出版社、一九八〇年五月。

⑥、『蕭紅選集』（中國現代文選叢書）香港文學研究社、一九八

〇年。

⑦、『跋涉』（中國新文學叢書）蕭軍・蕭紅合著、劉以鬯主編、香港文學研究社、一九八〇年。

⑧、『橋』悄吟、廣東人民出版社、一九八一年四月（文化生活出版社、一九三六年十一月復刻版）。

⑨、『蕭紅選集』人民文學出版社、一九八一年五月（人民文學出版社、一九五八年十二月增訂版）。

⑩、『生死場』人民文學出版社、一九八一年五月。

⑪、『馬伯樂』黑龍江人民出版社、一九八一年九月。

⑫、『蕭紅散文選』黑龍江人民出版社、一九八二年三月。

⑬、『蕭紅』（中國現代作家選集）王述編、三聯書店香港分店・人民文學出版社聯合編輯出版、一九八二年五月。

⑭、『蕭紅短篇小說集』黑龍江人民出版社、一九八二年六月。

⑮、『蕭紅散文選集』蕭鳳編、百花文藝出版社、一九八二年八月。

⑯、『Selected Stories of Xiano Hong』Translated by Howard Goldblatt『中國文學』雜誌社、一九八二年。

二、傳記評論・資料集

⑰、『蕭紅評傳』（文星叢刊339）Howard Goldblatt（葛浩文）、鄭繼宗譯、文屋書屋、一九七九年九月（『Hsiao Hung』美國杜尼公司、一九七六年飜譯）。

⑱、『論「呼蘭河傳」』（中國現代文學研究叢刊28）周錦、臺灣成文出版社有限公司、一九八〇年七月十日。

⑲、『蕭紅傳』蕭鳳、百花文藝出版社、一九八〇年十二月。

⑳、『蕭紅書簡輯存注釋錄』蕭軍、黑龍江人民出版社、一九八一年一月。

㉑、『懷念蕭紅』王觀泉編、黑龍江人民出版社、一九八一年二月。

㉒、『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釋錄』蕭軍、黑龍江人民出版社、一九八一年六月。

㉓、『蕭紅小傳』駱賓基、黑龍江人民出版社、一九八一年十一月（一九四六年改訂版）。

㉔、『夢迴呼蘭河』（爾雅叢書之107）謝霜天、臺灣爾雅出版社、一九八二年一月二十二日。

㉕、『落紅蕭蕭』劉慧心・松鷹、四川人民出版社、一九八三年六月。

最後にあげる㉔、㉕はともに蕭紅をモデルにした小説である。中國で作家を素材とした作品はそう多くないと思われるが、ここにも「蕭紅熱」の一端が示されていよう。「蕭紅生誕七十周年」（一九八一年）が一つの刺激となっていようが、それだけではない。

幼年時代の冷たい家庭環境、貧困の中で愛と自立を求めた葛藤、魯迅との出會い、そして日本軍の侵略によって次つぎと安住の地を追われ、三十歳の若さで迎えねばならなかった哀れな死。どれをとりあげても一篇のドラマとなる波亂にみちた生涯であった。しかしそれもさることながら、この動きの中で、いわゆる「抗日文學」といった既製の枠でくくりきれない蕭紅文學の柔軟性がみなおされているように思われる。

蕭鳳は、その『蕭紅傳』の「跋」で、蕭紅文學の魅力をこう述べる。

彼女は二十四歳にして名を成し、三十一歳①で夭折した。世に別れを告げて三十八年になる。だが彼女のあの人情味豊かな小説や散文は、時間と空間の枠を飛び越えて、ますます多くの國内外の讀者に、親しみ深く感動的な社會の風俗畫を、次つぎとひもといてみせてくれる。私は眼の前に廣げられた、これら年を經て黄ばみ、もろくなった紙片に對しながら、その觀察力の精緻さ、筆致の清新さに驚くとともに、起伏多く、不幸せなその運命に同情を覺えるのである。（125頁）

以上をまえおきとして、ここでは蕭鳳の『蕭紅傳』（⑲）をとりあげ紹介してみる。

まず本書の末尾に次のような記載がある。

一九七九年五月至十一月初稿；
一九八〇年元月至二月二稿；
一九八〇年五月至六月三稿。

このうち初稿は、

Ⓐ、『散文』一九八〇年第一期（創刊號）、第二期、百花文藝出版社（第一、二章のみ）

に發表され、つづく二稿は、

Ⓑ、『東北現代文學史料』第三輯、遼寧社會科學院文學研

究所、一九八一年四月（八月）に發表され、その三稿が定稿として單行本にまとめられたのである。

Ⓒ、『蕭紅傳』百花文藝出版社、一九八〇年十二月。

Ⓑの「徵求意見稿」がⒸに遲れて發表された理由については、Ⓑに付けられた「作者附言」が說明する。

もともと『東北現代文學史料』に發表して、各方面の方がたからのお教えをいただいて、その基礎の上にもう一度改訂を進め、本にするつもりであった。印刷關係の都合で、一九八〇年六月に完成した第三稿が百花文藝出版社から刊行されてしまったので、この原稿は改訂稿のあとに發表されることになった。ここにお斷りを申しあげる。（92頁）

さて私はⒶ（第一章のみ）を讀んだ時にはあまり强い印象をもたなかった。新しい發見も少なく、判斷の根據を示さぬ記述に終始したからである。研究にあっては判斷の根據が示されてこそ、後に續く者が再點檢し、あるいは推論に對する自らの判斷が下せるのである。これまでの中國での研究は、新しい見解がとりいれられてもその根據が示されないため、確信をもって採用できないことがしばしばであった。Ⓐを讀む限りその域を出るものではなかった。しかし改訂をふまえたⒸは面目を一新する。ていねいな注が付けられ、記述もくわしくなる。第一章のみの比較であるが、Ⓐ、Ⓑがそれぞれ三千字餘りと變化がないのに對し、Ⓒは一擧に六千七百字へとふくらむ。さらに、付けられた注も、單に判斷の根據を示すだけではない。異論がある場合には兩論を併記し――祖父の沒年（18頁）、兩親が蕭紅の結婚をとり決めた時期（18頁）、ハルピンで出產後、蕭軍とともに同居させてもらっていた友人②（25頁）、さらに一步進めて、異論を併記した上で、自らの判斷を下す――蕭紅の誕生日③（3頁）、祖母（5頁）、生母（7頁）の沒年、ハルピンに出て女子中學に入學した時期（14頁）など。これらは當然のことではいえ、誠實で、愼重な研究姿勢をうかがわすものである。

同じことは別の面からも指摘できる。

Ⓑでは、

蕭紅と同じ母から生まれた實の弟、張秀珂は、成人してからハムレットばりの苦惱をずっと抱えていた。彼は終始、自分と姉の父親は、實の父親ではないのではないかとの疑いを持ち、自分たちの祖父、祖母も實の祖父母ではないのではないかと疑い續けていた。（64頁）

と述べていた箇所を、©ではあっさりと削っている。これは蕭軍がその著『蕭紅書簡輯存注釋錄』(20)で提出して以來論議を呼んできた問題である。蕭紅の、父親に對するあの異常な憎惡をみれば、あるいは眞實であったかもしれない。少なくとも張秀珂がその疑惑にとりつかれていたことは事實であろう。しかし蕭鳳は定稿の段階でこの一段を削除した。

また、六年にわたって同棲し、蕭軍の胤まで宿していた蕭紅が、なぜ彼と別れねばならなかったかについても、

部外者がこうした事件の眞相を調べるのは大變むつかしい。というのも他人の生活や感情を尊重するのは、本來文明人の最低限の教養であるからだ。ましてや男女間の感情は、もともとが極めて微妙で、最も個性的な心理の動きなのである。夫婦間の悲歡、離合は、いかなる第三者であれ、判斷しがたく、かつ問題にする權利は持たぬのである。（101、102頁）

として愼重に扱い、その後、蕭軍は王德芬と、蕭紅は端木蕻良と結婚した事實をのみ述べるにとどめる。

以上のように、筆が安易に流れるのをいましめる筆者の姿勢は、この書を一貫しているように思われる。またこうした愼重さにかかわらず、いくつかの新しい事實も掘り起こしてくれる。例えば、

青島に居を構えていた時（一九三四年）舒群と蕭軍は、魯迅、黃源に面會するため上海へ渡り、その目的を達せず、その後再び舒群が單獨ででかけたが、これも失敗に終ったこと。（58頁）

一九三八年西安で、周恩來とともに蕭紅、蕭軍、端木蕻良、丁玲、塞克、聶紺弩らが記念撮影をしたこと（100頁）

――恐らくこれが蕭軍と蕭紅が一緒に寫した最後の寫眞となったであろう。

蕭軍と別れて、端木とともに武漢に戻った頃の蕭紅のい

らだった様子。（101頁）

重慶から香港へ脱出せざるを得なくなった理由。（108頁）

彼女が生涯にわたって崇拜していたのは孫中山であったということ。（115頁）

喉を切開手術したあとに移った法國病院が再び日本軍に接收され、臨時の病院にあてられた聖提司（ママ）凡女學校に移るにあたり、

當時日本軍以外には誰も自動車通行證を持たず、ガソリンもなかった。それで、こうした手術後の病人を運ぶのは、困難きわまりなかった。めどの立たぬ端木は偶然の機會から、一人の日本從軍記者と出會った。彼は英語も話せる知識人で、何度も端木に車を貸し、蕭紅を運んでくれた。彼自身も蕭紅と顔を合わせたことがある（120、121頁）

と、われわれ日本人には少し救いがあるエピソードを殘してくれたこと。

これらはいずれも舒群や端木の回想を引き出すことから生まれた片ぺんたる事象である。しかし筆者は、それらを丹念に綴りあわすことによって、蕭紅文學の全體像を浮かびあがらすことに成功している。

さてそれでは筆者は蕭紅の作品をどう讀んでいるのか。「傳記」という性格上全面的な作品論の展開はないが、いくつか斷片を拾ってみる。

蕭紅が最も得意とする文體は抒情的な散文であり、最も手なれた題材はこれまでの自己の生活を回想したものである。彼女は過ぎ去った生活の一こま一こまを鮮やかに、はっきりと記憶しており、胸のうちには哀しみを祕めたぬくもりがあふれている。（84頁）

蕭紅の筆にかかると、魯迅は偉大な思想家であるだけでなく、寛大で溫厚な老人であり、中國文化界の思想的指導者であるだけでなく、圓滿な家庭の主人であり、妻を大事にするよき夫であり、息子に理解があるよき父であり、丹精こめて後輩作家を育てる、情宜に厚く、慈しみ深い老師であるのだ。蕭紅の魯迅を回想したこの文章（『回憶魯迅先生』を指す――引用者注）には、女性作家の特徴がよくあらわれている。ほかの魯迅先生を記念した文

章と較べてみても、とりわけて清新で味わい深い藝術風格をそなえている。（107、108頁）

しかし、彼女は創作面においては風格をそなえた作家ではあったが、生活面においては一人の軟弱な女性にすぎなかった。彼女は眼の前の社會に對して不滿を覺えると、自然と思い出の中の幼年時代が戀しく思い起こされ、それがため子供時代の生活にまつわるある種の牧歌的な情感があふれだす。こうした情緒が『呼蘭河傳』の中には十二分に表現されているのだ。（115頁）

蕭紅はこの「小城三月」で例外的に、かなり人情味あふれる光のベールをかぶせた。こうした調子とこれまでの自傳性を持った作品とを較べてみると、格調はがらりと違っている。これは自分の家庭を美化した唯一の作品である。このことは當時の蕭紅の心情をくっきりと浮かびあがらせてくれる。香港での生活を通して絶望と悲慘をなめつくした彼女は、愛着をこめて自分の青春を思い起こす。ところがそうした過去の生活の一こま一こまは、彼女を感情的に引きずっていって、以前憎惡していた人物を愛すべきものへと變えさせてしまった。（118頁）

その弱さも含めた人間蕭紅の全體像をすくいあげ、そこから生みだされる一つ一つの作品に溫い眼差しを注いでいる。蕭鳳の「跋」の一節を先にあげたが、それに續く部分は一層このことを明らかにしてくれる。

恐らくは私が女性であるがためであろう。私はわが民族の優秀な女性作家をとりわけ大切に考えている。私は蕭紅の作品から明らかとなった、あの慈愛を求めてやまぬ、多愁多感の心を探求し、彼女の生き生きとした肖像をつまびらかにする中で、彼女の傳記を書こうと決意した。（125頁）

これに對し、從來通りの次のような硬直した評價からは、このような蕭紅文學の全體像はみえてこない。

抗日戰爭の中期、蕭紅は中國革命を指導する力と革命の道筋について、當然持つべき正確な認識に缺けるところがあった。前進して抗日の奔流に身を投じることもなく、個人的な苦惱の淵に沈み、勞咳に苦しみ、政治的な思想水準は時代の發展についていけなかった。こうした

ことはその創作の中に反映されている。『呼蘭河傳』（一九四〇）は、現實の闘爭の主要矛盾を離れて、二十年代の農村生活の回憶に返っていった。――中略――　作者が描くところは、農村生活の平穩、保守、凄慘、愚昧であって、農村における最も根本的な矛盾、つまり地主階級と農民の鋭い闘い、革命勢力の萌芽と成長といったことは全くみられない。（『中國現代文學史』（上）七省（區）十七院校《中國現代文學史》編寫組、內蒙古教育出版社、一九八〇年七月、422頁）

現在盛んとなりつつある蕭紅研究は、こうした從來の評價の枠を打ち破り、より柔軟で、多様な蕭紅論を生みだしている。こうした中にあって、ここに紹介した『蕭紅傳』は、堅實な論證に支えられ、生ま身の蕭紅に迫まろうとした力作である。

（一九八四、四、四）

注

① 筆者蕭鳳の年齢の數え方には疑問がある。蕭紅は一九一一年六月に生まれて、一九四二年一月に沒している。數え年なら三十二歳、滿年齢であれば三十歳としなければならない。これ以外にも、蕭紅の經歷を算定するところで疑問が殘る。

② 「之後、他們曾經住在一個朋友的家中、後來又被朋友驅逐了出來」として、注⑮でこの「朋友」については不明だとする。しかし『國際協報』文藝副刊の主編をしていた裴馨園の妻の回想「二蕭與裴馨園」（黃淑英講述、蕭耘整理『東北現代文學史料』第四輯、黑龍江省社會科學院文學研究所、一九八二年三月）が全てを明確にした。

それによれば、大水の中を救出された蕭紅は蕭軍とともに裴の家に落ち着く。ところが蕭紅と裴の妻（二十二、三歳）との仲がうまくいかず、

「就在悄吟從醫院分娩回來後不久、忘記爲了一件什麼事、（好象是我在三郎面前說了悄吟的閑話）說着說着就與三郎爭吵了起來」として、二人は飛び出してしまったとする。陳隄は同じ問題をとりあげるが、けんか別れをするのは、蕭紅の入院・出產の前だとする。（「漫話寫蕭紅」『學習與探索』一九八〇年第一期）

③ 筆者はこれまでのさまざまな說を紹介したあとで、蕭紅の誕生日を一九一一年六月二日、陰曆五月五日と結論する。ところがこの年の端陽節（陰曆五月五日）は六月一日である。榮燿祥が檢討した上で下した結論、六月一日說がほぼ正確であろう。（「蕭紅的生日到底在哪一天？」『社會科學戰線』一九八〇年第四期）

（立命館大學　岡田英樹）